

17) BrdU を用いた胆嚢粘膜の解析

黒崎 功・渡辺 英伸 (新潟大学第一病理)
 吉田 奎介 (同 第一外科)
 丸田 宥吉・斉藤 英樹 (新潟市民病院)
 藍沢 修 (第一外科)
 三輪 浩一・浅井 正典 (新潟臨港総合病院)
 (外科)

Bromodeoxyuridine (以下 BrdU) は DNA 合成期の核に特異的に取り込まれる。この BrdU に対する単一クローン抗体が発見され、細胞周期の研究が比較的簡便にできるようになった。胆嚢においては化生上皮の解析が胆嚢癌発生を知る手掛かりとなると思われた。今回外科切除非癌胆嚢25症例59部位を用い、in vitro にて胆嚢上皮の増殖能、増殖帯について検討した。一般に、胆嚢の固有上皮、軽度の化生上皮では BrdU 陽性細胞は少数散発である。胃型、腸型の化生上皮では増殖帯に相当する陽性細胞の高密度域を形成するものが認められた。また、標識率(細胞1000個当りの陽性細胞数の割合)も高値であることが示された。

18) 親子スコープ方式胆道鏡により診断し得た胆道癌の1例

波田野 徹・佐藤壽志子
 日置 将・堀 聡彦
 小島 豊雄・片桐 次郎
 渡辺 裕・大貫 啓三 (立川総合病院)
 市田 文弘 (内科)
 鈴木 万里・佐藤 攻
 大溪 秀夫 (同 外科)
 丹羽 正之・後藤 俊夫 (新潟県立がん
 センター新潟
 病院 内科)
 小越 和栄 (新潟大学)
 佐藤 啓一・福田 剛明 (第二病理)

症例は67才男性。昭和63年6月29日近医にて ALP 580 IU/l, rGTP 257 IU/l と肝障害を指摘され7月6日当科受診。自覚症状なく、腹部エコー、DIC にても異常なく、禁酒指導し経過観察していた。その後も ALP, r-GTP の軽度上昇続き12月8日入院し ERCP 施行。中～下部胆管に隆起性病変認め、親子スコープ方式胆道鏡下ブラッシング、細胞診で class V の診断を得た。平成元年2月1日膵頭十二指腸切除術施行。胆管に 5.7×2.0cm の結節浸潤型病巣認め、組織学的には高分化型腺癌 n₁(+) n₂(+) であった。術前診断に経口的胆管内視鏡が有用であった症例と考え報告した。

19) 奇異な膵管走行を示した pancreas divisum の1例

滝澤 英昭・銅冶 康之
 八木 一芳・柳沢 善計
 阿部 実・成澤林太郎 (新潟大学)
 上村 朝輝・朝倉 均 (第三内科)
 富樫 満 (新潟労災病
 院 内科)

57才男性、検診の US で腹部嚢胞を指摘され精査入院。各種画像診断および生化学的検査で嚢胞の由来臓器の確診は得られず、手術および病理学的に副腎嚢胞と診断された。精査時 ERP で尾部まで続く主膵管は総胆管と共に主乳頭に開口し、膵鉤部に分布する短い膵管は副乳頭に開口していた。両膵管に交通はなく通常の pancreas divisum とは異なる膵管走行を示した。膵は胎生初期の2つの原基に由来し両者の癒合により形成される。本症例の成因として癒合した膵管が再分離したという考え方、および胎生期の膵原基の発育が通常例と異なり癒合不全が生じたとする考えがあり、膵発生過程上、興味ある膵管走行を示した症例である。

20) 粘液産生膵癌の2例

小島 豊雄・佐藤壽志子
 日置 将・波田野 徹
 堀 聡彦・片桐 次郎
 渡辺 裕・大貫 啓三 (立川総合病院)
 市田 文弘 (内科)
 鈴木 万里・佐藤 攻
 大溪 秀夫 (同 外科)
 佐藤 啓一・福田 剛明 (新潟大学)
 (第二病理)

最近経験した粘液産生膵癌の2例について報告する。1例は65才男性で、糖尿病以外は無症状であったが、ERCP における膵管の嚢胞状拡張とファーター乳頭からの粘液流出所見より粘液産生膵癌と診断した。もう1例は78才男性で上腹部不快感あり精査したところ、血清学的異常はなかったが、エコー・CT より膵内に嚢胞所見がみられ、ERCP により膵管の拡張・断裂像がみられたため、膵癌を疑い手術したところ粘液産生膵癌であった。粘液産生膵癌は比較的予後良好な膵癌で、特徴的な画像所見を示すとされている。本2例も、自覚症状や血清学的異常に乏しかったが、画像所見から早期に膵癌と診断され、外科的切除可能であった事より、貴重な症例と考え報告した。